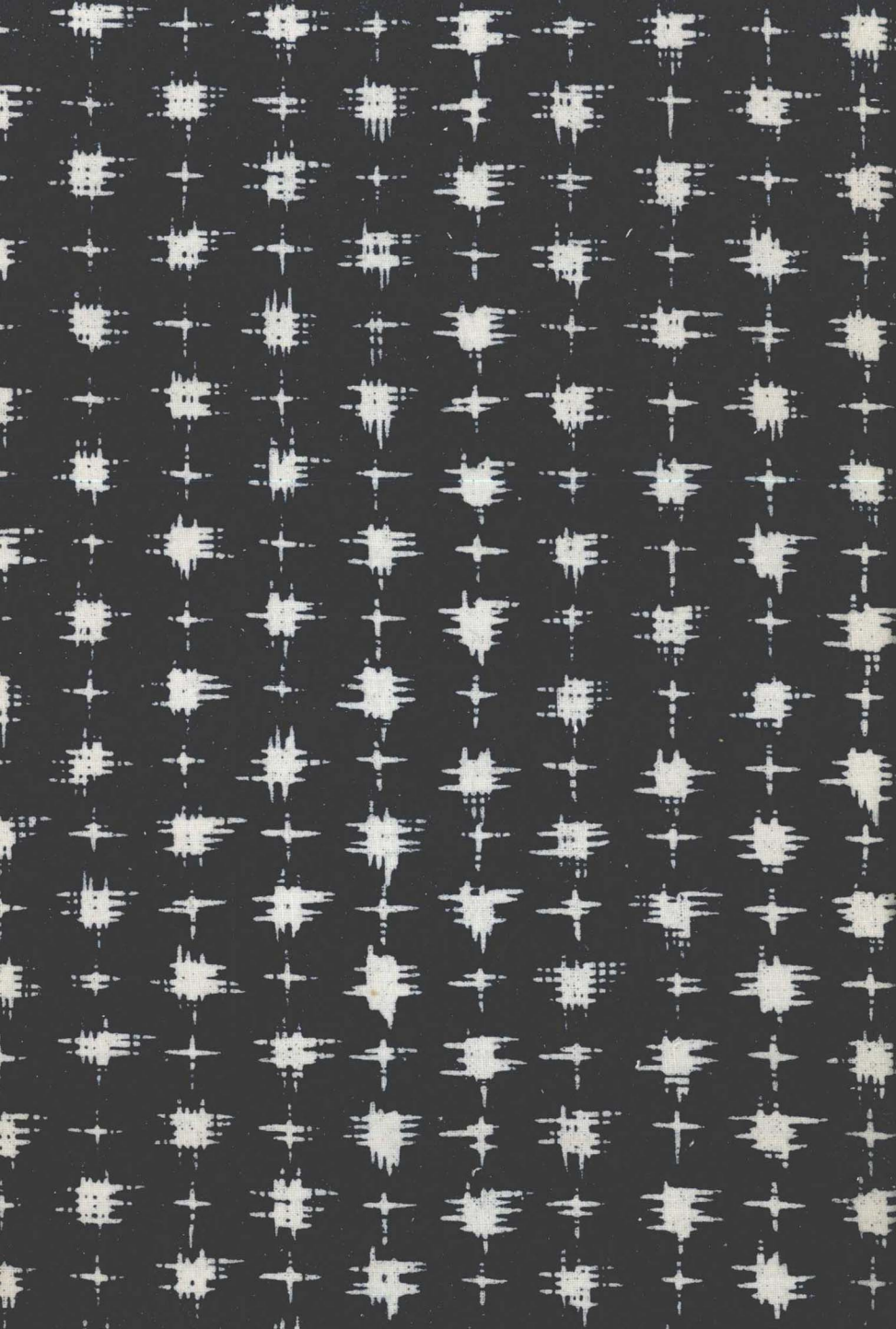




木山捷平全集

第五卷

講談社

木山捷平全集 第五卷

昭和五十四年三月十五日 第一刷発行

定価 三八〇〇円

著者 木山捷平

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

編集 株式会社 第一出版センター

印刷 豊国印刷株式会社
製本 島田製本株式会社

© 木山みさを 昭和五十四年
Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替え致します。

木山捷平全集

第五卷

目次

〈小説〉

柚子風呂

裏の山

留守の間

かなかな

口婚

山つつじ

苦いお茶

穴倉

市外

豆と女房

川風

柚子

二

五

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

最低

一五七

好敵手

一六九

茶の木

一八四

針

一九五

鼠ヶ関

二〇三

たびびと

二一四

姉妹道

二三七

赤い提灯

二三八

どんこ

二四七

葉鶏頭

二六一

〈随筆〉

I

郷土の古墳

二七五

困碁漫談	二七
靖国神社	二八
藪医者	二九
千畳敷の鼻の中	三〇
死の風景	三一
先生の格	三二
はじめての本	三三
わっぱ煮	三四
まだ見ぬ青森	三五
あの頃	三六
現代文芸家色紙展	三七
私の好きな方言	三八
子どもの教育	三九
十月の味	四〇
銀座の思い出	四一

Ⅱ

睡蓮の葉

三〇四

軒

三〇五

ドクダミ

三〇六

草の葉木の実

三〇七

おかぐら

三〇九

変り身

三一〇

指宿の蘇鉄

三一一

木の見物

三一二

女房自慢

三二四

角帯兵児帯

三二六

週間日記

三二八

長寿星

三三一

木の匂い

三三三

秋の虫

三三四

十一月の博物誌

三六

津軽節

三八

隣り同士

三〇

貧乏礼賛

三三

日記 昭和三十七年～三十八年

三七

あとがき 木山みさを

三九

題字 蓬 萊 利 兼
装幀 アトリエ・セブン

木山捷平全集

第五卷

小
説

柚子風呂

私の知り合いに片柳さんという老人がいる。明治十四年生まれだというから、ことしの誕生日がくれば満八十一歳というわけである。

が、この片柳さん、ちよつとみたところでは六十歳くらいにしか見えない。やせ型のほっそりとしたひとで、もう数年前から私はこのひとをときどきみかけた。私が散歩していると、道でばったり会うことがあるからであつた。夏なればゆかたにカンカン帽、冬なればインバネスに中折れ帽をかぶっている風態が、ちよつと時代ばなれしていた。それもあるが、いつだって手さげ袋のひもを手首にかけてゆつくり静かに歩いている格好が私の興味をそそった。

私が青年のころ、下宿していた家の近所に一人の老人がいて、いつも手さげ袋を持っているので、私が中に何がはいつているのかときくと、

「これは武士の刀だよ」と得意満面でいった。

刀を入れるにしては袋が小さすぎたので、さらに追及すると、その老人は大の将棋ずきで、袋の中には愛用の将棋の駒を入れて持ち歩いていたのである。そんなことを連想したからであつた。

ところが連想というものは当たることもあれば、はずれることもある。わかつてしまえばたわいないことだが、二年ほど前、私が近所の銭湯に行つてみると、片柳老人が手さげ袋をさげてはいつてきたので、ハハン、ナルホド、と合点がいったのである。

その時、私はもう老人が片柳姓であることを知つていた。やはり散歩のとき、その老人が自宅にはいるのを見つけて、門札を見るとそう書いてあつたからであつたが、いきなりものをいうわけにもいかなかった。それからまた一年ほどすぎて、やはり同じ銭湯でいっしょになった時、

「片柳さん、あなたはせつけんをお忘れになつたんでしやう。でしたら、どうぞこれをお使いください」

と私が銭湯の流し場でせつけん箱を差し出すと、

「いやあ、どうも相すまんなあ。年をとると頭が錯誤して、わしはきょうはタオルを二本もつてきてね。なんと気がきかんことよ」

と老人が苦笑した。

「お年だって、おいくつになられますか」

「さあ、いくつだったかな。明治十四年生まれだよ」

「へへえ。ではよくよりも二十三も大きいんですなあ」

「そうよ。わしは兵庫県の片いなかで高等女学校の校長をしとったが、五十の時にきっぱり勇退してね。いまにして思えば少々はやすぎたかなあ。しかし以前はそれが相場だったんだから、不服はないよ。ちよつぱりではあるが、いまだに恩給もさがってくるしなあ」

「失礼ですが、恩給ってどのくらいさがるんですか」

「月に七千円ちよつとだが、風呂代には事欠かないよ。わしは銭湯がすきで、あちこちの銭湯を歩き回るのが唯一の道楽でね。家にも風呂はあるが、減多にはいったことはないよ。家の風呂にはいると、なんとなくカンゴクに入られたような気がするからなあ」

そんなことから私は老人と口をきくようになったが、しかし片柳老人は道楽であちこちの銭湯を巡回しているの

で、私が行きつけの風呂で会うことはほとんどなかった。昭和三十六年の冬至の日、東京は冬晴れのあたたかい天気だった。私は久しぶりにお昼すぎ銭湯にでかけると、しばらくぶりに片柳老人に出会った。女湯は相当混んでいるらしく、にぎやかな話声がきこえていたが、男湯は閑散だった。湯の中に沈んだり、湯船の縁に腰をかけたらしなが

ら、私は老人から次のような話をきいた。

なんでもそれは老人が女学校校長を退職して、退職記念に今はなき奥さんを帯同して丹波から丹後、それから但馬へと一週間ばかり旅行した時のことだそうである。

丹後の宮津、天の橋立を見物して、それから但馬境のさびしい山にさしかかったとき、

「あら、あんた、どこかで鈴の音がきこえますよ」

と奥さんが立ち止まって耳をすました。

「え？ どこで？」

と片柳老人も立ち止まって耳をすますと、なるほど何か木立ちの奥の方で鈴の音が聞こえているのである。

「山に迷った人か、それともガケから落ちた人が助けを求めているんじゃないかしら」

と奥さんが不安なまなざしで片柳老人の顔をうかがった。

そういわれてみると、ほっておくわけにもいかず、くまざさをわけて鈴の音の聞こえている方に近づいて行くと、山の切崖のような所で三十になるかならぬ小男が、一生懸命、というよりも何か物につかれたように手に握った鈴をふっているのが見えた。

「あんた、あれ、幽霊じゃないかしら」と奥さんが片柳老人のそでにすがりついた。

「どうしてだい。いまどき、幽霊なんかいるものか」

と片柳老人はなだめるようにいったが、奥さんのふるえがうつったのか、片柳老人のからだもふるふるえ出した。

「でもあんた、あそこ、あの男の前にあるのはお墓ですよ」

と奥さんがいった。

「え？」

と片柳老人がよく見ると、なるほど小男の前には、土をこんもり盛ったお墓のようなものがあるのが目にとまった。

「とにかくいつて見よう。このまま引き返すのは、かえって気味が悪いよ」

と片柳老人は奥さんの手を握ったが、奥さんは身をちぢめて動こうとしない。

「じゃ、わしが一人で行ってくる。お前はここで待つとれ」と片柳老人は奥さんを待たせておいて、一人で墓地のはずれまで着いた。

「あの、もしもし、何かあんたのからだのぐあいでも悪いのかね。わしは旅のものじゃが」

とおっかなびつくり声をかけると、小男が鈴を鳴らすのをやめてふりむき、不思議そうな顔をしてにやりと笑った。

「あんたは名前を何というのか」

と片柳老人は聞いてみた。

「名前は山田安夫といひます」

「職業は何か」

「職業は郵便配達であります」

「どうしてあんなに一生懸命、鈴を鳴らしておったのか。」

何かわけがあるのか」

「ああ、この鈴のことですか。だんな、聞いてくださいますか。それではお話ししましょう」

と小男が草の上に腰をおろして話し出した。片柳老人も腰をおろした。

「この鈴はあッしの母親が今から十四年前に、あッしに買ってくれたものなんです。そのとき、あッしは尋常小学を出たばかりでしたが、家が貧乏なうえに父親に死に別れて、母一人子一人になっておったのです。それで学校の先生の世話で村の郵便局につとめることになったのですが、そのときいちばんつらかったのは、夜の夜中に電報を配達しなければならぬことでしたよ。」

こんな山の中の村のことですから、めったに電報は来ませんが、来たら一里、一里半の山道をかけ足で配達に行かねばならないのです。

『安ちゃん、またキトク電報が来たよ。ご苦労だが配達に

行っておくれんか」

と夜の夜中でも局長の奥さんが家に言いに来ますと、もうあとにはひかれません。

はじめの二回ほどは、母親が気づかつてついて来てくれましたが、運わるく小学校友だちに見つけられて、安公はオカアといっしょに電報くぼりをしよる、なんて評判になったので、あッしの方から母親にたのんでやめてもらいましたが、母親はそのかわりに町からこの鈴を買ってきてくれたんです。

なれてしまえば夜中の電報配達もそんなにこわいものではないかもしれませんが、母親の方が気にして、

『安や、その鈴をように鳴らして走れよ。その鈴の音がきこえないと、オカアは家にいても心配でたまらんからのう』
というものですから、あッしはオカアを心配させまいと思つて、必要以上にチリン、チリンと音をたてて走つたものなんです。

その母親もいまから八年前、父親のあとをおつて死んでしまいました。あッしは四月十九日の母親の命日には、こうしてお墓に参つて、思いきりその鈴をふつてやることにしているのです。親子二代の貧乏で、まだ正式の墓もたててやれませんが、せめて一生懸命この鈴をふつてやるのが、あッしの追善供養のようなものなんです」

と老人が話してくれたので、

「それは奇特な話ですなあ。なんだかばくまで身につまされるような思いがしますよ」

と私が感心して相づちをうつと、

「それからわしはその山を越えて、日本海側に出て、その晩は城崎（きのさき）という温泉にとまったんだが、あその温泉にはその時分、宿屋に内湯がなかったわい。それでやむを得ず外に出て、生まれてはじめて金一円也を投じて家族風呂というのにはいつてみたよ。うん、うん、ムロン家内と二人だったが、家内がいやに気をもんでのう」
「どうしてですか」

「わしの女学校の卒業生がこのへんにもヨメに来るかも知れないというんだ。家族風呂にはいる所を、もしも卒業生にみられたら恥ずかしいというんだ。その時家内は齡が四十二にもなつておつただけだなあ」

片柳老人は柚子（だいだい）のにおいがぶんぶんと鼻をつく湯船につかつて、遠い記憶を反芻するかのやうに風呂屋の高窓に目を注いだ。四十二歳という年齢は一般のひとが思う十九、二十に相当するのもかも知れなかった。なにかそんなやうに老人の目がいきいきと輝いてみえた。